

# セイの選択 2



## 設定

ノンケ陸上部大学生 × マッサージ師兼宗教団体代表

マッサージ師による音、映像、香りによる洗脳マッサージから始まり、宗教団体が使っている、人に快感を呼び起こし、依存させる銀粉でさらに追い詰めていくお話です。

(※SM というよりは洗脳メインです)

## 登場人物

篠原 拓(しのはら たく) 21 歳 4 年 陸上部部員

無邪気で明るい。少年がそのまま成長したような性格。本堂に永遠にとれない銀色の液体で全身を染められ、本堂が代表をつとめる宗教団体に入信。

宮田 尊(みやた たける) 21 歳 4 年 陸上部部員

知的でクールに見えるが、いつも人の気持ちを考えて行動している。

本堂 正一(ほんどう しょういち) 48 歳 マッサージ師兼宗教団体代表

穏やかそうに見えるが実際は残酷。粘着気質。聖銀主と呼ばれている。

佐藤 翼(さとう つばさ) 30 歳 陸上部コーチ

指導の際は厳しいが、それ以外はとても気さく。学生から慕われていたがコーチ職を辞め本堂の宗教団体に入信。拓に本堂を紹介した人物。

富岡 陸(とみおか りく) 20 歳 3 年 陸上部部員

拓と尊の後輩。資産家の息子。先輩にはいい顔をして、後輩等立場の弱い相手には強気。

## 精進

銀色に囲まれた空間の中で、銀色の液体は静かに息づいている。男たちはその液体に身を委ね、眠りについてた。

まるで母の腹の中、まだ言葉も選択も知らなかった頃の水の中。重さはあるのに苦しさはなく、音は遠く、世界は丸く、やわらかい。

安心、自由、快樂……。ここでは責任は存在しない。何かを決める必要も、背負う必要もない。ただ、すべては与えられる。

やがて、その銀で覆われた空間に朝の陽ざしが差し込むと水面がわずかに揺れる。指先が、まぶたが、ゆっくりと動き始める。

目を開けた男たちの瞳には、驚きも疑問もない。彼らはもう知っている。この安らぎは一度きりではないことを。従い、浸ることで、何度でも与えられるということを。

男たちは静かに息を整え、その液体の中から立ち上がっていった……。

男たちは一晩中抱かれていた銀色の液体からあがると、お辞儀のような姿勢でその場で固まる。いつものように笑顔で、いつものようにその股間をびくつかせて……。

液体が乾いたところに本堂と、団体の幹部たちがやってくる。幹部たちも本堂のように様々な色を持っている。本堂と幹部が一度口に含んだものを口移しで、朝食としていただいていく。本堂や幹部達への感謝を示すお辞儀の姿勢で、笑顔をうかべながらそれらを摂取していく。幹部の中には銀子とのその行為を好むものも結構いて、長時間口と口をつけ、離れないものもいる。

朝食が済むと銀子達に尿をさせ、その尿をワイングラスで受け止めると、本堂たちはそれをおいしそうに飲み干していく。逆に本堂たちの尿は哺乳瓶のような容器に入れられており、それを銀子たちが噛みしめながら長い時間をかけて体内に吸収していく。銀子は単なる道具ではなく、本堂たちとつながっていると感じさせてくれる大事な時間だ。その間もちろんペニスはびくついている。

摂取が終わると、本堂の使い古した靴下や下着などを口に含み、その臭い、味を堪能していく。その臭いはあのマッサージ店で嗅いでいたものにどこか似ていて、安らぎへと導いてくれる。

(ああ……………聖銀主様……………♡)

自身の銀色に染められた体にうっとりしながら、本堂の臭いを感じ、受け入れ、ペニスをびくつかせている。1時間ほど経つと、その布を口に含んだまま、他の銀子とペアになり、向かい合い、お互いの乳首を強めの力で責めていく。

ぐにゅぐにゅぐにゅ……………コリコリコリ……………。

「ぐふう♡……………ぐふう♡ぐふん……………♡ぐふん……………♡」

「ギンギーン♡……………ギンギン♡ギーン♡」

言葉を奪われて、同じ言葉を動物の鳴き声のように繰り返す佐藤はすこしみにじめに見えた。それでもその顔や肉体は全力でその喜びを表現している。佐藤が選んだ『セイ』が正しかったと証明するように……………。

毎日のこの訓練のおかげで拓の乳首も大分大きくなり、より敏感になった。その胸の突起は、自身のペニスのように立ち上がり、本堂たちの愛撫を心待ちにしている。

乳首の訓練が終わると、中庭に出て、その真ん中でたかれている火の周りを踊りながら回っていく。あの商店街で踊っていた男たちの踊りを自身に吸収していく。

他の銀子達は一糸乱れぬ、姿勢、動きで踊っている。時折、竹刀で本堂達から尻や背中をたたかれながら一心不乱に……。叩かれれば叩かれるほど、その笑顔はさらに強調され、その肉棒もさらに激しく踊り出す。

火の温度を全身に受け、体内から余分なものを排出しながら本堂がよしとするまで延々と踊っていく。

他の人から見れば苦痛に見えるかもしれない……。しかし拓は、本堂に与えられることに幸せを感じ、また、その一体感の中で新たな喜びを見出していた。

「銀子拓……………この生活にも大分なじんできたようだね……………」

「はい……………聖銀主様……………導いていただいてありがとうございます……………」

ビクンビクンッー！

本堂と話をするだけで、股間が熱を帯び、血が全身をかけめぐる。その声に、その息に、その動きに、その微笑みにうっとりとしてしまう。

「お前も今日からは私の許可がない限りしゃべるのは禁止だ。他の銀子達